大学生活の一大イベントである学園祭まで一ヶ月を切った現在、多くの学生がその準備に取り組んでいるだろう。私たちがその時を待ち焦がれる理大祭、それはどのようにして出来上がるのだろうか。今回は、その中枢を担う理大祭実行委員会（以下、RFC）の活動を紹介する。

RFCが理大祭に向け動き出すのは、期末試験直後の2月で、そこでは役員決めを行う。現在140人程で活動しており、それぞれ、総務局、企画局、広報局、デザイン局に分かれている。本格的に動き出すのは、新入生の勧誘を行う4月からで、人手を必要とするRFCにとって非常に重要なスタートであろう。5月に入ると、理大祭に招く芸能人を決め始めなくてはならない。芸能人の手配は、芸能事務所の仲介会社を通して行われるが、手続きに時間が掛かるので、この時期から動き出すそうだ。招待する芸能人は、まずRFC全体で招きたい芸能人を募集し、その中から予算や、学園祭に出ていただける人であるか、さらに知名度などを考慮した上で決定される。芸能人を招いて行われる企画は、本学の学生のみでなく、学外の人々の関心を集めるという意味でも非常に重要である。今年の理大祭に登場する俳優の千葉雄大さんも、理大祭の注目度を大いに上げてくれるのではないか。タレント企画や、ミス・ミスター理科大コンテストを始めとする実行委員会主催企画は、企画局が担当している。企画の内容は概ね夏休み前に企画局内で案がまとめられ、その後の実行委員会議で承認されることにより決定される。基本的には昨年度の企画を基にし、そこからさらに向上させていく形を取っており、また去年から始まった女装コンテストのように新しい企画が生まれることもあるそうだ。

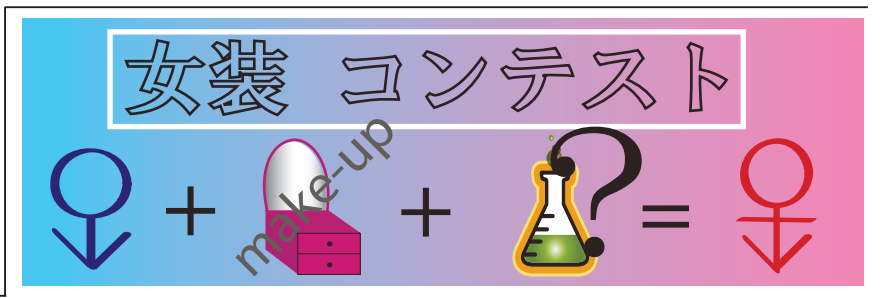
▲看板を作る様子

実行委員会議は、5、6月から2週に1回の頻度で行われ、これには基本的に全員参加することになっている。この会議はII部の授業後の21時20分から開始されるそうで、I部の人にとっては遅すぎる時間であり、その他の活動でもI部とII部の時間調整は課題となっている。RFCの活動は基本的に局単位で行われる。チームワークが大切であるため、特に局内ではお互い知らない人がいないように、局長や上級生を中心に局内のコミュニケーションや雰囲気作りにも力を入れているそうだ。また、9月上旬には、理大祭プレイベントが行われたが、このイベントは局に関係なく1年生が中心となって企画し、実行している。普段の活動は局単位で行われるが、最終的にはRFC全体としてのチームワークが重要となってくるため、こういったところで自分の所属する局以外と連携する場所を作っている。チームワークやサークルの雰囲気作りは、RFCだけでなくどの団体にとっても重要なことで、15000人の来場者を迎える理大祭を作り上げるRFCのチームワークは、ぜひ見習いたいところである。ちなみにプレイベントは、JR飯田橋駅横のRAMLA（ラムラ）で開催され、ミス・ミスター理科大コンテストの事前投票や、スーパーボール作りといった実験教室が行われ、RAMLAを訪れた一般の人を中心に大いに盛り上がりをみせた。

企画局だけでなく、理大祭はRFCのどの局が欠けても成り立たない。総務局は、理大祭の企画参加団体の管理を行っている。理大祭でのさまざまな出し物は、RFC総務局が何か問題が起きない様に手配し、当日も責任をもって対応できるという保証があってして初めて可能となるのである。理大祭の当日の混乱を招かない為の周到な準備と、学校側の許可を得る為に水面下で活動している。またデザイン局は、ミス・ミスター理科大コンテストやタレント企画で用いられる幕、3号館ピロティの装飾などを一手に引き受ける。これらは全て手作りであり、夏季休暇後半から授業の合間を縫って理大祭直前まで作成が続けられる。広報局では、理大祭の広報活動全般を担当し、理大祭のパンフレット作成や、理大祭にかかる資金集めが主な業務内容となっている。協賛を募るのは、現在の不景気もあって状況は芳しくないそうだ。そこは担当者の努力次第であると広報局長の与田智之さんは語る。実際に今回の理大祭資金もしっかりと集めてきており、なんとも頼もしい存在である。企画局が理大祭を表と裏の両側から盛り上げる局とすれば、これらの局は、まさに理大祭を陰から支える存在といえる。

15000人の来場者を迎える理大祭という大きな祭りを作り上げるRFCには、ユーモアあふれる人材が揃っている。RFCの夏合宿は、ロックアウト期間を利用して8月の12日から14日に福島県猪苗代湖で行われた。日本で4番目に大きく、また日本一水質の良い湖の一つである猪苗代湖の合宿地で行われた企画は、RFC内で各班に分かれて出し物をし、優勝を競うというものだ。班分けは局関係なしに全体で行われ、出し物の内容は、毎年女装を交えたものが多いそうだ。女装コンテストが始まった昨年よりも前から、RFCは女装が好きだったのかもしれない。その他にも、RFC内で恋人にしたい人、浴衣が似合いそうな人などの投票をし、各企画の総合順位が高い班は面白い特典が与えられる。理大祭以外でも常にエンターテイメントを考えているようである。

理大祭準備をしていて大変なところは、やはり準備に時間がかかるため、勉強以外の大学生活での大半の時間を割かなくてはならないところだそうである。2月から約10ヶ月もの期間をかけて準備される理大祭、ぜひRFCの影の努力にも注目していただきたい。それだけの努力と、常にエンターテイメントを考える彼らが支える理大祭はすぐそこまで迫っている。今から待ちきれない思いだ。



今年度も神楽坂地区理大祭において女装コンテストが開催される。会場は2号館1階の212教室で、開催時間は理大祭2日目の午前11時から12時30分である。神楽坂地区理大祭の女装コンテストは、今年で第2回を迎える企画だ。昨年この企画が行われる前は、当日どのくらいの人が見に来るのか、どのくらいの反響があるのか予想がつかず、もし反響がなければ昨年のみの幻の企画となる可能性もあったそうだ。しかし、当日の会場は超満員、企画担当者の予想をはるかに上回る盛り上がりを見せたため、今年も開催する運びとなった。どうやら本学の学生に女装は大人気のようである。

当日一番の目玉イベント「シチュエーション企画」は、女装した候補者とその相手役で、テーマを基に演技をしてもらうというものである。昨年のテーマは「告白」であった。また今年の女装コンテストでは「候補者とお客さんとの距離が近いコンテスト」を目指している。その例として、観客席の側で行われる階段ウォーキングや、候補者がくじを引き整理券の番号の人に直接景品を渡しに行く抽選大会などといった候補者と観客の距離を近づけるような企画を計画しているという。

では、その女装コンテストにはどのような人が出場するのだろうか。出場者に話を聞いたところ、出場のきっかけは優勝賞金や自分への挑戦、友達が出ていたからなどであった。中には優勝賞金で実際にオカマバーに行き、女装の世界の本場を味わってみたいと言う人もいた。女性らしさを出すために意識していることは、自分の好きなスカートを履くこと、男らしさが出ないよう肌の露出を控えること、さらには自分が世界一可愛いと思い込むことなどがあった。コンテスト当日までは、ダイエットに励んだり、笑顔の練習をしたり、また女性をよく観察し、服装や女性らしさを学んでいくそうだ。今年は観客との距離も近づくので、昨年以上にさまざまな面から女装の完成度を審査されることが予想されるため、出場者は一層力を入れている。出場者の中には、周りから女性らしいとよく言われる人や一度もそう言われたことがない人もおり、当日はさまざまなタイプの女装を見ることができるはずだ。

▲女装コン昨年度優勝者（左）と準優勝者（右）

女装の鍵を握る一つに、メイクがある。今回出場者の一人にメイクの仕方を教えていただいたが、メイク方法はハイライトを入れるなど本格的で、女性顔負けであった。その上で、アイシャドーで涙袋や垂れ目を作るなどしてより女性らしさを増すメイクを施すそうだ。しかし、私たち新聞会で教えていただいた通りにメイクを施しても出場者ほどの完成度には至らず、どう見ても男性がただメイクをしているといった見栄えになってしまい、メイク一つとっても、出場者のレベルの高さがうかがわれた。

そのような奥深い女装の世界をぜひ覗きに行ってはいかがだろうか。当日の会場への入退場は自由であるが、来場者が多く、会場に入りきれない場合は整理券を配布することや、入場を締め切ることもあるので、絶対に行きたい人は早めの入場をおすすめする。また、事前投票としてTwitterのファボ投票（お気に入り投票）が行われたり、Twitterで定期的に情報を提供したりするようなのでぜひそちらの方も積極的に参加して投票を行ってほしい。

〝Gift〟という英単語を辞書で引いてみた。私たちが日常的に使う「プレゼント、贈り物」の意は当然のような顔をして一番目の項目に掲載されていた。片仮名で「ギフト」と言えば大方この意味で使う。もちろん、有名な「天賦の才能」という意も少し遅れて並んでいる。

〝Gift〟の語源は〝Give〟であるという説がある。〝Give〟と言えば、〝What He gives us.〟という表現がすぐに思い付く。神様より賜った贈り物、まさしく「天賦の才能」と呼ぶべきものだと思われる。今回私はこの言葉の中に、「才能」に加えて、人間が天から授かったすべてのものを含めた拡大解釈的連想ゲームをしてみようと思う。

私たち人間は誰一人として同じ人はいない。言い換えるとすれば、私たちは一人ひとり別々の贈り物を頂いた、と解釈して差し支えなかろう。顔立ち、声の高さ、体躯などは、どれをとっても人それぞれ異なるうえ、一人の人をその人たらしめる要素になっている。つまり、これらの違いが私たちの「個性」となっているのだ。能力差があるのはその点では至極当たり前のことなのである。

「人生はギャンブルと同じで、与えられたカードに一喜一憂するのではなく、そのカードをどう使いこなすかが重要なのだ。」どこか遠い国の偉い人が言っていた気がする。これを私なりに言えば、先天的に授かったGiftを、それがどのようなものであれ、個々の人生の中でどのように活用するかによって、如何様にも変化し得るということだ。誰にでも長所があれば必ず短所もある。完璧な人間などはこの地上に創られなかったのだ。すべての人は多かれ少なかれ欠点を持っている。このことを自覚することは、自分自身に驕ることなく反省し改善する意識に繋がる。それだけでなく、活用の仕方によってはその短所でさえもその人の強みとなり得るのだ。つまり、そのGiftをどう扱うかはその人自身の裁量に委ねられている。「病は気から」とでも喩えるべきか、天からのGiftに限らず、目に映る多くの物に対して肯定的に接してみよう。もちろん、これは一つの矮小な提案に過ぎないから、宇宙の全事象に対して懐疑的に取り組むのも悪くないし、それは人それぞれに与えられた権利である（この権利は果たしてGiftに含まれるのであろうか。もしかすると人間同士で授受し合っているものなのかもしれない）。唯一確かなことは、ポジティヴな視点で世界を改めて見たとき、それまでとは違った糸口が見つかることだ。何か考え事をして行き詰まったときは、すべてを一度受け入れるという選択肢を自分に提示してみるのも悪くない。たとえ直接の解決にならなくても、きっとそれがきっかけとなって上手く乗り切れるはずだ。

手持ちのカードならぬ、貰ったGiftを使いこなす。利用法は種々あれど、どうせなら私たちの人生を豊かにできるような使い方をしてみようではないか。